

2021.2.23

GTR 院生企画 “Acade-Mix” 活動報告

文責 川口 航平

【企画者】

川口 航平	生命農学研究科植物生産科学専攻 博士後期課程 2 年
木下 悟	理学研究科生命理学専攻 博士後期課程 2 年
Qianqian Luo	生命農学研究科植物生産科学専攻 博士前期 1 年
Yap Jia Xin	理学研究科生命理学専攻 博士後期課程 1 年

【概要】

本企画は、留学生と日本人学生の英語での異分野研究交流を目的とした、学生主催の研究発表会とそれに関連する取り組みである。

【本企画の開催背景と目的】

昨今、国内マーケットの縮小や研究の多様化から、国際社会において、多様な価値観を持つ外国人とコミュニケーションを取りながらビジネスや研究を推進する「グローバル人材」が求められている。本学でも、G30（グローバル 30）国際プログラムやジョイントディグリープログラムなど、国際的リーダーとなりうる博士人材を養成することを目的としたプログラムが採択されている。その一方で、THE 世界大学ランキング (<https://japanuniversityrankings.jp/rankings/total-ranking/>) によると、名古屋大学の国際性のスコアは、66.9 と他の国立大学の水準よりも低く、特に国際化という観点では、欧米だけでなく、アジア諸国の大学にも遅れを取っている。

我々は、その理由の一部として、以下を考えた。

- ①留学生は留学生同士で、日本人学生は日本人学生同士でコミュニティを作る傾向が根強くあり、自身の研究室以外での留学生と日本人学生の国際交流の場がほとんどない。
- ②留学生は、日本人の研究に興味を持っているにもかかわらず、多くの講義やセミナーが日本語で行われるため、内容を理解することが難しい。
- ③日本人学生は、英語を話すことに苦手意識を持っており、英語でのコミュニケーションや国際学会への参加を避ける傾向にある。

我々は、このような背景から、『留学生、日本人学生、両者に有益となる院生企画』として、英語での研究交流の機会提供を目的としたイベントを行うことで、名古屋大学の学生の国際化を加速させることを考えた。

【事前調査】

名古屋大学の日本人学生と留学生の英語での研究交流に関して、現状を理解し、問題点を明確にするために、日本人学生と留学生に対してアンケートを行った。その結果、13人の日本人学生と9人の留学生からの計22人から回答を得た。

日本人学生からの回答：

英語での研究交流に対して興味は持っているが、自身の英語力に不安を感じている。

アンケートにおいて、「今までに自分の研究を英語で発表したことがあるか？」という質問に対して、7人（約46%）が「いいえ」と答えており、日本人学生の約半数が英語で研究を発表した経験がないことが分かった。さらに、「日本で留学生と国際シンポジウムや学会、他、学術イベントなどで意見交換をしたことがあるか？」という質問に対して、5人（38%）が「いいえ」と答えており、留学生が約3000人在籍している名古屋大学であっても、1/3の日本人学生は、日本で留学生と研究交流をした経験がないことが分かった。一方で、「英語での研究交流へ参加したいか？」という質問に対しては、9人（約69%）が「はい」と回答しており、日本人学生は英語で研究交流をする経験が少ない一方で、英語での研究交流に対しては、興味を持っている人が多いことが分かった。

また、「英語の研究発表で難しい点はどんな時か？」という質問に対して、「英語の言い回しが思いつかない」や「英語が早くて聞き取れない」といった回答が多く、自身の英語を心配していることが分かった。

留学生からの回答：

日本人の研究に興味があるが、英語での研究交流の機会がない。

アンケートにおいて、「日本人学生と英語で研究交流する機会が欲しいか？」という質問に対して、8人（約89%）が「はい」と回答しており、多くの留学生が日本人の研究に対して興味を持っていることが分かった。その一方で、「日本で日本人学生と国際シンポジウムや学会、他、学術イベントなどで意見交換をしたことがあるか？」という質問に対しては、4人（約44%）が「いいえ」と回答しており、約半数が日本人学生と研究交流をした経験がないことが分かった。

また、「日本人との研究発表で難しい点はどんな時か？」という質問に対して、「英語のスライドではないから、理解できない」や「理解力が高く、難しい質問をしてくる」といった発表形式や内容に関する回答が多く、語学力に関する回答は少なかった。

以上の事前調査の結果から、留学生と日本人学生の英語での異分野研究交流は、非常に需要が高いこと、そして、日本人の英語力の不安を取り除くサポートが必要であることが、考えられた。

【開催内容】

日 時：2020年12月17日（木）13:00～18:00

会 場：新型コロナウイルス感染症の対策の観点から、Zoomを用いて実施した。

対象者：発表者は、生物・化学を専攻する修士と博士の学生を対象とする。

聴講者は、学部、研究科や学年を問わず、参加可能とした。

内 容：13:00～13:10 Opening Remarks

13:10～14:10 1st session

Kawaguchi Kohei

“Search for adhesions factors and functional analysis in grafting”

Huang Tzu-Ting

“Neural basis of aging in sensory perception and learning behaviors”

Nakai Daichi

“Reconstruction of locomotions in prehistoric animals by bone histology”

14:10～14:20 Break time

14:20～15:20 2nd session

Qianqian Luo

“Search for grafting enhancers by chemical screening”

Thanachok Taticharoen

“Factor influencing in cracking of polished young coconut”

Oka Hiroya

“Construction of transcript regulation mechanism prediction model based on binding motif environment of Transcription factor AoXInR in *Aspergillus oryzae*”

15:20～15:30 Break time

15:30～16:30 3rd session

Tanaka Yoshiki

“Development of Multifunctionalized Fluorescent Dye and Application to Cell Imaging”

Jia Xin Yap

“Small molecule germination inhibitors of parasitic plant *Striga hermonthica*”

Nakajima Haruna

“A development and an Application of Carbon Nanotube stamp”

16:30～16:40 Break time

16:50～17:00 Award & Closing

発表のサポート：

希望者への発表前の練習の機会の提供、発表中の翻訳スタッフの配置により、発表者の英語を話すことへのハードルを下げる取り組みを実施する。

【本企画の成果】

報告者は、本企画で以下の成果を得ることができたと考えている。

新規コミュニティの形成

本企画には、発表者および聴講者として計 28 人が参加した。そのうち 11 人（約 39%）が GTR 生であり、過半数は卓越大学院プログラムに所属していない学生であった。他分野との融合研究が求められる GTR 生の参加人数が少なかったことは及第点であるが、その一方で、卓越大学院プログラムに所属していない学生への研究発表の機会提供ができたと考えられる。これまで、GTR や G30 では、異分野の研究交流が行われてきたが参加者がプログラムの学生のみで、プログラム外分野との研究交流は行われてこなかった。本企画では発表者をプログラム履修生に限定せず、生物・化学を専攻する修士と博士の学生を対象にしたことにより、これまで研究発表の機会がなかった学生に対して貴重な機会の提供ができたと考える。

また、各発表の質疑応答の時間には、時間いっぱいまで、多くの質問が寄せられ、英語で活発な議論が行われた。自己紹介や企画者、発表者および聴講者のコンタクトを目的として作成した Slack のグループには、企画後にも書き込みがあり、一部の学生は個人的にコンタクトを取っているとも聞いている。このような理由から、本企画をきっかけに、新規のコミュニティの作成ができたと考えている。

本企画に対する高い満足度

本企画に参加した 28 人のうち、12 人（約 43%）の学生が、企画後のアンケートに回答した。今回の企画に参加した満足度に関しては、41.7%の学生が大変満足したと回答し、50%の学生が満足したと回答し、不満であるおよび大変不満であると回答した学生はいなかった。日本人学生からは、英語でのプレゼンや質問を練習するこのような機会提供に関して、好意的な意見が多くみられた。留学生からは、異なる研究に関する英語での聴講機会の提供に関して、好意的な意見が多くみられた。両者とも、次回の開催を希望する声が多くみられた。このような理由から、本企画の満足度は非常に高く、日本人の英語力の向上および留学生と日本人の研究交流の場の提供という本企画の目的を達成できたと考えられる。

発表のサポートのための取り組み

本企画では、希望者への発表前の練習の機会の提供と、発表中の翻訳スタッフの配置により、発表者の英語を話すことへのハードルを下げる取り組みを実施した。発表前の練習は 2 人が希望し、企画者が発表内容や質疑応答に関するアドバイスをを行った。発表中には、質問の意味が分からなかったり、英語での言い回しができなかったりすることが稀にあったが、MC と翻訳スタッフにより、議論を円滑に進めることができた。学会等では、このようなトラブルの場合、議論が止まり、知りたい情報が得られないことがあり、これが日本人の英語での研究交流の障壁となっている。英語の練習の機会として実施した本企画では、MC と翻訳スタッフの配置を行い、これがこのような問題点を解決するための有効な手段の一つであると感じた。

【企画者からのメッセージ】

本企画は、「研究に興味があるのに、日本語だから分からない」という、ある留学生の不満から始まり、そこに、賛同する学生が企画者となって、本企画が開催された。GTRの院生企画は、「こんなことを勉強したいのに、独学だと難しい」や「こんな経験がしたいのに、機会がない」といった、『日々の不満を自ら解決できるシステム』であると我々は考える。日々の生活でもし、不満を持っている事があれば、是非、このシステムを利用して欲しい。とは言っても、「具体的に何をやればよいのか？」や「何をする必要があるのか？」が分からず、躊躇っている人もいるだろう。もし、質問や不安な点があれば、本企画の企画者まで、連絡を取ってほしい。